

次号予告

特集 体力増強と評価

体力とは……………日本女子体育大 山 川 純
 脊髄損傷者の体力増強と評価……………太陽の家 高橋 寛・他
 脳卒中片麻痺患者の体力評価と維持・向上の
 ためのプログラム……………中伊豆リハセンター 窪田 俊夫・他
 心疾患における運動負荷テストの実際……………北大医技短大 高橋 正 明
 脳性麻痺者の身体的作業耐久性の向上と評価

……………大阪府立身障センター 辰巳三代子・他
 と び ら バスにのる……………長崎大医技短 長 尾 哲 男
 講 座 摂食 6. 摂食障害の治療（精神滞滞）……………群馬大医技短大 鷺 田 孝 保
 小児の運動発達 5. 運動行為の発達と感覚統合

……………長崎大医技短大 土 田 玲 子
 プロGRESS 介助用ロボットの可能性と限界……………工業技術院 中 野 栄 二
 あんてな 理学療法士・作業療法士の教育（養成計画、
 質的向上など）……………杏雲堂病院 佐々木 智 也

編集後記

スポーツの秋に整形外科の特集を御送りすることになったが内容が豊富できっと御満足戴けるものと信じている。

先股脱に関する坂口論文は限られたページ数の中で治療法の変遷が見事に集約されていて興味がつきない。ある意味では側彎症と先股脱が整形外科、特に小児整形の原点であったといえるであろう。知名度の高い教授や政治家まがいの教授の名がつけられた治療法が流行し、あたかもそれが最上の方法であるかの如く宣伝され世界的に流行し、結局患者が迷惑を被った治療法も数多い。先股脱に関しては長期間固定を強制するロレンツ法よりも最近では機能的に治療することを重視してリューメンブューゲル法が主流である。内科系、外科系をとわず常に医学の進歩には素直に目を開き常によりよいものを患者に提供する姿勢が必要であることをこの論文は教えている。“テーピングの理論と実際”の川野論文はこの雑誌で今日まで特別に取り上げていないテーマで重要なものなので特にお願ひしてまとめて戴いたものである。靱帯損傷の度合によりテーピングでは不十分な例もあるが関

節の安定性を高め動揺を防ぎ、受傷直後の治療としてあらゆる医療職が持つておかねばならぬ知識である。今回はその一端を御紹介戴いたが興味を持つ人は更にとり組んで戴きたい分野である。手指の外傷と障害の問題点をまとめて戴いた吉松論文では各手指関節における問題点、注意点が述べられている。

症例報告として我が国に症例が多いとされている後縦靱帯骨化症の作業療法を中心に国立療養所村山病院、日本大学医学部板橋病院、総合せき損センターの OT の方々に実際のプログラムを御執筆戴いた。

講座は「摂食」と「小児の運動発達」で両者とも格調高い内容となっている。

先般の JAL 事故で私共に縁の深かった大阪大の塚原伸晃先生が不幸にも亡くなられたことはショックであった。心から御冥福を御祈りする次第である。

この雑誌の内容に関して、特に新しい読者の方々からの御希望、御意見など編集部まで御寄せ下さるようお願いしている。

（荻島 秀男）

<編集顧問>

天 児 民 和
 九州労災病院名誉院長

五 味 重 春
 東京都衛生局顧問

砂 原 茂 一
 国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
 国立身体障害者リハビリセンター病院長

（五十音順、以下同じ）

<編集委員>

上 田 敏
 東大リハビリ部

荻 島 秀 男
 ベイリンリハビリテーションクリニック高島平
 整形外科

大喜多 潤
 兵庫県リハビリセンター

寺 山 久美子
 都心身障害者センター

富 岡 詔 子
 信州大学医療技術短大

奈 良 勲
 金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
 筑波大学

松 村 秩
 都養育院リハビリ部

<編集同人>

池 松 洋 子

伊 東 元

岩 崎 テル子

宇都宮 初 夫

金 子 誠 喜

鎌 倉 矩 子

木 村 信 子

菊 地 延 子

小 嶋 裕

斎 藤 みち子

鈴木 明 子

高 橋 正 明

橋 口 順 子

田 元 隆

古 川 宏

松 沢 博

宮 崎 和 子

宮 前 珠 子

山 田 貞 雄

矢 谷 令 子

（担当 西塚・細田）